

日本経済新聞

東大病院の新たな出発　がん治療も世界に誇れる総合力発揮を



東京大学医学部附属病院は 10 月 1 日から東京大学病院に名称を変更しました。医学部の附属組織から大学付属の病院に組織も変わりました。大学本部が病院経営により直接関与する体制になったわけです。

背景には東大病院を揺るがした一連の不祥事があります。衝撃が大きかったのが、皮膚科教授だった佐藤伸一氏をめぐる事件です。民間との共同研究に関連し、飲食店やクラブ、風俗店などで接待を受けていたことが大学の調査で明らかになりました。報道によれば、吉原の風俗店での接待も含まれていました。

佐藤氏は懲戒解雇され、その後収賄罪で起訴されています。佐藤氏は東大医学部時代に筆者の弟と同級で、当時はおとなしい学生だったといいます。

東京大学医学部附属病院の名が最初に登場したのは 1877 年、大学創設の年です。病院の源流をたどれば安政 5 年（1858 年）に東京・神田に開設されたお玉ヶ池種痘所に行き着きます。幕末から明治へ日本に西洋医学を根づかせ、近代医学の教育・研究・診療を支えてきた病院です。

私は 41 年間の医師生活の 36 年間を東大病院で過ごしました。それだけに、今回の不祥事は痛恨の極みです。長い歴史のなかで積み重ねてきた信用を傷つけたことは、残念でなりません。とはいえ、この病院が持つ医療の力、とりわけがん治療を含む総合力は今なお大きな財産だと考えます。

東大病院のがん診療は「がんだけを診ない」ことが最大の特徴です。がんという病気だけではなく、がんを持つ一人の患者を丸ごと診ることができる。総合大学病院ならではの強みがあります。

がん患者の多くは高齢者です。心臓病や糖尿病、腎臓病、脳血管疾患などを抱えながら手術や抗がん剤、放射線治療を受ける患者も珍しくありません。東大病院にはほぼ全ての診療領域の専門家がそろっていて、がん治療中に思わぬ合併症が起きても、院内の他の診療科と連携して対応できます。

東大病院はかつて、臨床より研究を重視するあまり「患者を診る」視点が弱い、と批判された時代もありました。私が長年現場を見てきた実感では、現在の診療水準は大きく変わっています。

今回の不祥事を単なる名称変更で終わらせてはいけません。ガバナンスを立て直し、がん専門病院とは異なる独自の総合力をさらに磨く。東京大学病院という新しい名前にふさわしい、世界に誇れる総合病院を目指してほしいと思います。

2026 年 10 月 7 日